

【研究主題】 子らの自尊感情を育み、地域とともに前進する学校を創る

【副題】 自由意志によるボランティア活動の小さなつむじ風をトルネードにしな

【学校・団体名】 滋賀県大津市立田上中学校

【役職名・氏名】 校長 石田 博士

1 はじめに

本校は、大津市南部に位置し、創立75年目を迎える歴史と伝統に彩られた学校であり、一部の住宅地を除いて、のどかな田園風景が広がる中に立地している。昭和の後半から平成にかけて生徒数が急増し、生徒数千人にせまる大規模校となった頃もあったが、1998年の分離後、生徒数は横ばいからやがて減少傾向に転じ、現在の生徒数は、201名(各学年2クラス、特別支援学級が4クラス)の小規模校である。

この論文では、「人の役に立ちたい、地域の役に立ちたい」とする生徒の自主性・自発性を大切にしたいボランティア活動を、子らの自尊感情の醸成や地域とともにある学校づくりに活かそうとした実践について論述していく。

2 主題設定の理由

(1) 本校の教育的課題

校区地域については、学校や子どもの育成に大らかで協力的であるが、昨今の社会的経済情勢により、生活基盤の弱い家庭が増加し、家庭における教育力の低下など、重層的な課題が見られる状況にあることから、子らの人間関係づくりの拙さや生活習慣の乱れ、低学力など、学校生活へ少なからず影響しているものと考えられる。

子らについては、素直で人懐っこい反面、はじめでのことや不慣れな場所での挑戦の際にひどく失敗を恐れたり、「どうせ私は…」とすぐにあきらめたり、「めんどくさい」とすぐに投げ出してしまったりする傾向があり、自信が持てないでいる。また、学校や集団に適応できずに行き渋りや不登校となるケースが増える傾向にあり、それとともに保護者の不安や不満が深刻化し、その対応に苦慮するケースが増えてきている。

こうした今日的な本校の状況を根本的に打破するためには、生きぬく力の礎となる確かな「自尊感情

を育み、心豊かでたくましい人づくりをおこなっていかねばならない。少しくらいうまくいかないことがあっても、「できた」「喜んでもらった」「うれしい」という経験を粘り強く積み上げさせることで、「私は受け入れられている」「人の役に立つことは気持ちがいい」「人と人のつながりの中で私は成長できる」という思いをもたせることができれば、それが自己肯定感や自己受容感につながり、困難に出会ってもたくましく自分らしく生き抜ける人となると考える。

(2) ボランティア活動が持つ意義・ねうち

本校ではこれまで、生徒会の組織の中にボランティア委員会が設置されていたり、地域などからの依頼に応える形でボランティア活動をすすめてきたりした経緯があり、学校文化のひとつとしてボランティア活動が息づいている。

さて、ボランティアという言葉の語源は、ラテン語の「Voluntas(自由意志)」であると言われている。よって、「ボランティア活動」は、「自分の自発的・主体的な意志によって喜んでする活動」ということになる。活動を始めるときには、自分の中にある「やりたい!」という気持ちを一番大事にする必要があり、「やらされる活動」でもなければ、「みんながするからしかたなくする活動」でもないことが、とても大切なこととなる。活動時に子らが着用するビブスには、この「Voluntas」がデザインされている。



本校では、学校教育におけるボランティア活動が持つ意義・ねうちについて、次の5つをとらえた。

- ①自らの意志で決め、自ら挑む経験を、かけがえないものとして積み上げられる点
- ②人の役に立てる、地域の役に立てるという経験が、確実に喜びや自信につながられる点

- ③活動を通じて、同じ思いで集う者どうしや異年齢の方との交流が自然発生的に生まれ、人と人とのつながりを実感できるものとなる点
- ④活動を通じて、地域にある課題に自ら気づいたり、地域の方などがどのような思いでまちづくりに携わっているかを実感したりできる点
- ⑤なにより、よりよい「地域づくり」に自ら参画させることで、次の世代を担う人材の育成が期待できる点

以上のように、ボランティア活動には、人と人とのつながり、お金では得られない喜びや発見、充実感、SDGs からの視点を含む地域や社会に存在する様々な課題への気づき、地域や社会を自分たちの手で創っていくことへの経験値のアップなどが期待できる。また、こうした経験の積み上げは、子らの「自尊感情」をより確かに育み、子らが自らの「夢」や「志」へとつなげていくことができるものであると考えた。

3 具体的な実践

(1) 子らを勢いづけるしかけ

やらされるのではなく、子らが自らすすんでやりたくなるしかけとして、次の5点に配慮した。

- ①生徒会と連携し、生徒会の後押しを受けて推進する体制をとること。

給食時のお昼の放送『田っ中ナンデス』を活用した PR や活動参加生徒をゲストにした対談の放送を実施した。

- ②この取り組み名を生徒会長らを交えて協議し、『起こせ！ボランティア・トルネード』と名付けること。

子らによるボランティアの小さなつむじ風を仲間や地域を巻き込みながらトルネードのようにしていこうという具体的でわかりやすいイメージを持たせた。

- ③生徒デザインによるマスコットキャラクターをつくり出し、活動への愛着をもたせること。



▲ランティ

名前についても、「ボランティア」からとった「ランティ」とし、今後も末永く親しまれるものにし、活動の際ののぼり旗などへ

も反映した。

- ④ボランティア活動参加した子らには、ボランティアを受注したり発案したりした人からねぎらいと感謝の意を込めた「ランティシール（円形の小さなシール）」が授与されること。



▲ランティシール

中には、1人でそのシールを何枚も獲得し、自転車通学のヘルメットに貼り並べる子らもあった。

- ⑤『学校だより』により子らの活動ぶりを紹介するとともに、「楽しそうだなあ」「わたしもやってみようかなあ」となるように啓発すること。

(2) 地域と連携するしかけ

学校、生徒会、地域の思いをつなぐことが大切である。そこで、7月に「スタートアップ集会（全校集会）」を、地域の方にもご来校いただいて開催した。

生徒会長は、その集会で次のように述べている。

「実は今年の2月から3回にわたって、自分と2人の副会長、校長先生とが集まり、地域の方々からの意見を聞き取りながら、この企画を進めてきました。やりたいと思う心を大切にし、自分たちで企画を練り、中学生が中心となって行います。学年を越えて、また、田上中学校も越えて、地域の方々も含めた「大きな輪」を少しずつ築いていきたいです。」

また、地域の方からは、全校生徒を前に次のような言葉をいただいた。

「自発的なボランティア活動を、大いに歓迎し、応援します。地域に暮らす方々と「やりたいこと」



▲スタートアップ集会のようす

を「楽しく」成し遂げることが、みなさん1人ひとりの「成長」と「夢の実現」につながります。ぜひ、大きなトルネードを起こしてください。期待しています！」

これにより、活動への全校的な気運を高めることができ、また、このあと例年にもまして地域からのボランティアの依頼が届くこととなった。

(3) 子らが取り組んだボランティアの概要

子らが行った主なボランティア活動は、次のとおりである。総件数15件、のべ124名の生徒が参加し、活動した。

- ・学校周辺のポイ捨てゴミ拾い
- ・地域の方とともにを行う校庭の美化活動
- ・田上児童館が開催する親子イベントのスタッフ
- ・外来魚駆除のための親子釣り大会のスタッフ
- ・「田上っ子食堂（子ども食堂）」の配膳補助
- ・学区内の田上小・上田上小でのイベント参加
- ・「かまどベンチ」を使った「すいとん」の炊き出し（防災ボランティア・プチ体験）
- ・1人でお住まいの高齢者の方へのメッセージカードづくり など



▲地域の方との校庭の美化



▲釣り大会の補助

（４）子らが行ったボランティアの実際

上記の活動の中から、1年間の集大成としてフィナーレを飾ることとなった「かまどベンチ」を使った「すいとん」の炊き出し防災ボランティアについて、次に紹介する。

この活動は、いざという災害時に中学生として何ができるかを考える活動でもあり、校庭にある「かまどベンチ」を実際に使った子らによる防災ボランティアのプチ体験として取り組んだ。参加した子らは20名。12月3日（土）に実施した。

このボランティアは、実施10日前、学校近隣にお住まいの方（約45軒）への案内のちらし配りから始まる。子らが実際にそれぞれのお宅を訪れ、趣旨を説明しながら事前に案内した。そのことを知った近隣の方7軒より、すいとんの具材として、大根・白菜・人参・里芋・キャベツ・さつまいも・手づくり味噌をいただくこととなった。子らの喜びはいうまでもなく、地域の方とのあたた



▲事前の案内ちらし配り



かなつながりを実感することとなった。

炊き出し当日は、その方々も含め、ご来校いただいた地域の方に子らの活動ぶりを見ていただいたり、できあがった「すいとん」を実際に味わっていただいたりして、災害時にあっても地域とともにそれ乗り越えようとする本校の中学生の姿勢や参画の態度に触れていただいた。もちろん、自分たちで炊き出したすいとんを、自分たちでも食しながらその成果を確かめ合うこととなった。

また、当日は、ご来校いただいた地域の方に、子らによる簡単なインタビューをさせていただいた。インタビュー項目は、次の3つである。

- ・おうちでは、日頃から地震や水害などに備えて、何か取り組んでおられることや意識しておられることなどはありますか？
- ・災害が発生した時、中学生がお役に立てることは何だと思えますか？
- ・今後、私たち中学生が地域でできるボランティアについて、どんなことができるといいと思えますか？

このインタビュー活動により地域の方と直にお話しする機会が持てたことは、生徒にとってとても貴重なものとなった。また、この「問い」は、自らにも問いかけるものとなっている点がミソである。

4 実践の成果と課題

まず、生徒の活動後のふり返りを、次に紹介する。

「地域の人たちや友達といっしょに何かに取り組むことが、とても楽しかった。どうしたら効率よくできるかなど、考えることができた。いつも地域の方が草刈りをやってくれているし、こんなに大変なんだと分かったし、また手伝いたい。」

「実は、これまで、(ボランティアを)やろうとも思わなかった。でも、やってみたら、すごく楽しいし、またやりたくなった。もっとこうしたらいいともわかった。ゲームをしていた休日とはちがう過ごし方を見つけたんです。」

これらからもわかるように、子らは活動を通じて確実に新たな認識を獲得している。

また、6月と12月とに実施した学校アンケート

を比較してみると、「難しいことでも、失敗を恐れな
いで挑戦していますか？」の調査項目について、肯
定的な回答をする生徒の割合が次のようになった。

6月 69.2% → 12月 78.6%

これがすべてこのボランティア活動の充実に起因
するものであるとは言えないが、9ポイント以上の
アップは特筆すべき子らの変容と言える。

また、地域の方からボランティアの依頼件数が確
実に増えた。ボランティア活動を、子らにとっての
かけがえのない学びの機会ととらえていただき、学
校経営の力点のひとつとしていることへの理解と協
力を示していただけたものと考えている。

今後の課題としては、次の2点があげられる。

- ・全校的な気運は高められたものの、子らの「自
由意志」による参加を尊重することが大前提と
なる取り組みであるため、自尊感情が低いと思
われる子らをなかなか活動のステージにあげ
られない。
- ・地域からの依頼を受けて取り組む活動がやはり
件数として多く、子らの自発的な企画・発案と
いう点でまだ弱い。

5 「深化」をめざす新たな活動の創出

(1) さらに「深化」させたい視点

ここまで令和4年度の取り組みをもとに述べてき
たが、前述の成果と課題を踏まえて、令和5年度に
どのように修正・改善して取り組んだかについて述
べたい。

次の3点を修正・改善の視点とした。

- ・子らだけの活動ではなく、保護者や地域の方とい
っしょにその思いを共有しながら活動できないか
- ・自尊感情が低いと思われる子らでも参加しやすい
よう、取り組みやすさと気軽さで参加へのハード
ルを下げられないか
- ・ボランティアのなかみを、「ふるさと」を愛する心
を育成できるような活動に特化できないか

これらの視点から再検討し、令和5年度に組み
組むこととなったのが、「田上中ポイ捨てクリーンウ
ォーク」と名付けた取り組みである。

(2) 「深化」の実際（令和5年度）

「田上中ポイ捨てクリーンウォーク」は、令和4
年度に培ったボランティア・スピリッツ（「地域や人

の役に立つことすすんでできる中学生でありたい
という思い）を活かし、中学校区の道路にあるポイ
捨てゴミなどを拾ってきれいにするボランティア活
動である。7月から11月までに5回（5カ所）に
わたって実施し、生徒だけで活動するのではなく、
保護者や近隣地域の方もいっしょにできるような働
きかけをし、「地域を、ふるさとを、きれいにしたい」
という田上中の思いを皆と共有しながらともに汗す
るボランティア活動として生徒会との協議・連携の
もとに計画した。

第1回目となった7月の活動は、生徒・保護者・
地域の方・教員、あわせて13名が参加する活動と
なった。地域の方から、「田上中の応援団として、同
じ思いを持つみなさんと地域を美しくする活動に取
り組めることは、たいへんうれしいことです。」とい
う激励があった。また、活動終了時には、参加した
生徒から「心ないポイ捨てをみて悲しくなった
けれど、拾い集めたゴミの分だけ、まちを美しく
できたことを実感し、うれしくなった。」などとふり返りの感想を述べ、皆で
共有することができた。



「ふるさと」をきれいにしたいという中学生の思
いをともに活動することで後押ししていただいた保
護者や地域のみなさん。そして先頭を歩く子らの姿。
この取り組みがねらう姿がまさにそこにあった。こ
の活動の輪が、今後、回をすすめるごとにますます
広がっていくことを期待している。

6 おわりに

学校教育におけるボランティア活動が持つ価値は
大きく、教育的な効果も高い。また、ボランティア
活動が結ぶ「縁（えにし）」は、地域とともにある学
校を充実させ、子らを社会全体で支え合って育て
いくという思いを共有するものとなる。そしてな
により、子らが起こす小さなつむじ風があらでもこ
ちらでも起こるようになれば、大きなトルネードと
なって地域をも大きく巻き込むことになるであろう。

今後も、本校は、ボランティア活動を「深化」さ
せながら人づくりをおこなっていく。ともに汗して
ともに人のため地域のために活動することできる子
らこそが、「未来」である。